コロナ感染下でのＤＶ、性暴力被害者対応を通じて

対馬ルリ子

４月７日、とうとう緊急事態宣言が出て、銀座もゴーストタウンのように人気がなくなった。デパート、ブランドショップ、レストラン等も全て閉店し、人気がない街は異様な雰囲気となった。当院も診療は午前のみにして午後はスタッフを帰宅させ、急患や薬を取りにくる患者のみとなった。あとは、どうしたらこの事態に際して私なりの医療ができるだろうと考えていたところ、「ステイホームにより世界中でＤＶ増加が懸念される」と国連からの勧告があり、とりあえずかけこみ寺？をやってはと考えついた。

もちろん当院で緊急避妊もできるし、妊娠の判定も、中絶や流産手術もできる。また、緊急事態に陥った女性が、感染リスクの高い病院の救急外来に行くのをためらうことも考えられた。

ＳＮＳで、何か困ったことが起こったら、いつでも連絡をと呼びかけた。年齢や収入、居住地などの条件を問わず受け入れること、もちろん妊娠中でも子連れでも、お金の心配をしないでとりあえず連絡をと、クリニックと個人のメールアドレスを入れて発信した。ところが驚くことが起こった。一夜にして、いいね！が 3000 件、シェアが 1800 件と、驚くほどたくさんの人たちが反応し情報を広げてくれたのだ。

その中で、知り合いの理学療法士さんが「子育て支援団体を作ったので、一緒に子育て中のお母さんたちに発信したい。オンライン相談室をやりませんか？」と連絡をくれたことをきっかけに、４月１５日から毎週水曜日の午後に「女性の心と身体のオンライン相談室」をやることになった。ここに看護師さんの子育て支援団体、助産師さんのＤＶ被害者支援団体などが連携し、毎週、様々な相談者と支援者が、オンラインでつながって広がるネットワークができていった。相談者には、子育ての相談をしているうちに自分がＤＶの当事者であることに気がつき支援につながった人、不安やイライラが更年期症状であると気づいた人などもいた。

また、同時に、緊急避妊薬のオンライン処方が可能な医療機関リストを作ってシェアしたり、オンライン緊急避妊の早期実現に向けて提言書を用意したりと、若手女性医師たちも動いており、支援者同士や医師たちも、Web 会議を毎週のように行って情報交換を行うようになった。

当院には、ＳＡＲＣやボンドなどの支援団体から性暴力被害者の受診、検査の依頼も入るようになった。また、メールやＳＮＳ、電話で被害者から「夫がイライラして夜になると暴力をふるうので怖い」「ネットカフェを追い出され行く場所がない」などの相談も入るよう

になった。これまで、社会に隠れていた“行き場のない、支援につながれない”女性たちの状況が、コロナ自粛生活によって増幅し、あぶり出されてきたようだった。

　おそらく、ふだんならこのような女性たち・・性暴力を受けた、ＤＶにさらされている、行き場がなく彷徨っている女性たちは、何気なく緊急避妊薬を手に入れたり、友人宅や性風俗産業に身を寄せているのだろう。今回の経験は、私にとってたくさんの「密室」に隠されている女性や少女たちの状況を思い出させる結果になった。

今後は、我が国でも、先進国で人口５万人に 1 カ所は必要と言われているワンストップセンターが地域女性医療の拠点の一つとして全国各地に配置されることを、また、世間がこのような女性の状況に関心をよせてくれることを、切に希望する。

（2020 年 7 月　東京産婦人科医会会誌へ寄稿）